

まちづくり

Partnership

協働

～ごみゼロ「遺魂し」運動推進中！～ 第29回全町クリーン作戦実施

4月27日、「第29回全町クリーン作戦」が町内一円で実施されました。このクリーン作戦は、「人・モノ・自然を大切に『遺魂し』の心を生かして、ごみゼロのまちを築きましょう」をスローガンに、区長をはじめ各行政区の皆さん、町建設協力会や各団体、ボーイスカウト、ボランティアの皆さんたちが、毎年「協働」で実施しているものです。

早朝から町内の各行政区で、道路や公園、集会所などの可燃・不燃ごみの回収が行われ、町建設協力会や各事業主が所有するトラックで集められたごみは、町役場駐車場で分別処理後、リサイクルプラザ（白河市）へ搬入されました。



回収されたごみの量
(4tトラック等)
不燃ごみ 26台分
可燃ごみ 5台分
ご協力ありがとうございました！

～里山の豊かな自然を満喫～ こうすっぺ西側お花見ウォーク

4月19日、こうすっぺ西側イメージアップ作戦（富永創造会長）主催の「こうすっぺ西側お花見ウォークIN YABUKI」が開催されました。

こうすっぺ西側イメージアップ作戦は、美しい里山づくりを目指し、史跡「袖ヶ館」周辺の遊歩道整備や除草作業をはじめ、隈戸川流域にひまわり・アジサイ等の種まき・植栽、河川の水質・生物調査等を行っているまちづくり団体で、今年で活動14年目となります。

館橋あじさい広場からスタートしたお花見ウォークは、隈戸揚水機場、袖ヶ館跡、桜ヶ丘広場、水車跡広場を巡る約6Kmのコース。豊かな自然に触れようと参加した19名の皆さんは、里山の地理や歴史について説明を聞きながら、里山の春を楽しみました。



～水上ステージに熱い声援～ しゅんらん春まつり

4月27日、矢吹町バンド連合会（長尾裕之代表）主催の「ShuN-R@n GIRLS☆ PRESENTS しゅんらん春まつり」が、大池公園水上ステージで開催されました。

晴れ渡る青空の下、夢子舞、四季彩舞の皆さんが、元気いっぱいよさこいを披露。その後、矢吹町をはじめ、白河市や郡山市、栃木県さくら市のバンドやアーティストの皆さんが作り出す音楽、さくら市のご当地アイドルや町のご当地アイドルShuN-R@n GIRLS☆のパフォーマンスに、来場者から大きな声援が送られました。

また、会場には復興露店が立ち並び、大勢の人々で賑わいをみせました。



私のひと言



矢吹町長 野崎吉郎

「矢吹町・三鷹市姉妹市町締結50年に思う」

「両市町間の理解と親善を深め経済の提携を盛んにし、特に中小企業の育成と郷土の発展を策し両住民の福祉増進に貢献する」。

これは、矢吹町と東京都三鷹市との間で「姉妹都市交流」を締結した際の目的として謳われた文章である。昭和39年7月2日締結とある。あれから50年の長い歳月が流れ、その間、本町と三鷹市で交わされた「姉妹市町締結」に基づく交流が半世紀を迎えることになる。50年という節目を迎えられたことは、矢吹町にとっても、私にとっても、大変喜ばしく、感無量である。前にも書かせて頂いたが、三鷹市は行革、情報発信、行政サービス等々において日本を代表する都市として余りにも有名だが、この模範且つ最先端を行く同市と交流できることは無上の喜び、また誇りでも

ある。締結以降の交流は多岐に亘る。議会、行政の交流をはじめ、民間交流として、スポーツ、芸術文化、物産、まちづくりといった幅広い住民同志人と人、心と心のふれあいを育み、友情の輪を広げ、引き継がれてきた。交流が開始された昭和39年のご存知の通り、東京オリンピックが開催された年であり、戦後の躍進する日本の復興を決定づけ、世界に知らしめた意義深い年であった。

今では、両市町住民誰もが知るお互いの関係。しかし、では、何故両市町が「姉妹市町締結」するに至ったかを知る人は少ないのではないかと思う。50年の節目でもあり、またとない機会でもあるので、そのいきさつ、キッカケを紹介してみたい。

その当時の三鷹市の市長さんは鈴木平三郎氏（故人）。お医者さんでもあった氏は、三鷹市制施行後3代目として、三鷹市長に昭和30年4月に就任。以来5期20年の長きに亘り、市政の重責を担った市長であり、その功績は多大だ。一例として、全国初となる公共下水道普及率100%といった偉業を、なんと昭和48年

に達成するなど数多くの業績を残し、今なおその手腕は、高く評価されている市長であった。一方、当時の町長さんは、先代（現会長の父）大木代吉氏（故人）。町制施行後2代目として、昭和38年4月、町長に就任。2期務めた。地域を代表する老舗の名店「大木代吉本店」の社長として、酒づくりと町づくりに貢献。戦後の矢吹町の基盤を確立した町長として名高い。そのお二人のご息とご令嬢、鈴木克己氏（故人）と大木千恵子氏が昭和37年に結ばれたこと、また、当時、精神科医であった克己氏の開院先を、妻の実家である広大で閑静な矢吹の地に求めたことが、姉妹市町交流のそもそもキッカケであったと伺った。この西白河病院は、現在も当町はもとより、地域の精神医療に欠かせない存在であり、近年は、ご子息の鈴木修平理事長のもと、老健施設も併設しながら、地域住民の医療・福祉施設として運営されている。

こうした、いきさつを知るにつけ、あらためて思うことは、いきさつはどうか、お二人の先見性の見事さにつくづく敬服するのみである。以前、当時を知る関係者からこんな話を聞いたことがあった。両市町の姉妹市町締結にあたって、両市町の有識者から、「何故その市が、その町が姉妹市町なのか、何をもってその相手を選んだのか」といったことを。そうした声にお二人は、「歴史が、交流の足跡が、次代の両市町住民に評価される時が、必ず来る」と言ったと言う。50年が経とうとしている今、お二人の思い、英断がまさしく証明されたと感じ、強く実感している私たちが現に居る。